

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅰ 5章1～13節>

キリスト教の倫理は厳しい？ この個所は考える順番が大事。  
後ろの方から考えること！

①(まず9-13節から) 教会の外の人を裁かない。

「聖書に書かれているような奇麗ごとを言っていては、この世は生きていけない」と考える人が時々います。しかし、ここを読めば、その考え方は正しくないということが分るでしょう。イエス・キリストの救いを知らずによく言動をする人を裁く資格は私たち信仰者にはないのです。また、「そういう人たちと一切つきあってはならないというなら、世の中から出て行くしかない」(10)、とパウロは言います。そこには、自分は正しいと高ぶっていた以前の自分の姿を思うパウロがいるでしょう。同時に、そんな自分を赦して下さった神様を思うパウロもいるでしょう。この世のどんな人も、神様の救いに与る可能性を持つ存在なのです！

②(次に6-8節) キリストの救いに深く感謝する者として。

ここでパウロは、信仰者が考えるべき大事なことを出エジプトの出来事からの二つの比喻を用いて語っています。その一つが「過越の犠牲とされた小羊」(出エ 12:6)で、イエス・キリストの十字架の死によって私たちの罪が赦されたことを考えています。キリスト者の倫理はこのキリストによって罪赦された恵みを感謝する人々の問題で、パウロが「内部の人々の問題だ」(12)と言う所以です。

③(最後に1-5節) 無責任な罪の見過ごしは愛ではない。

よって、このキリストの犠牲の死を知ったのに、いい加減な生き方をする者を放っておくことはできません。「自分たちの間から除外すべき」(2)は厳しく聞こえますが、それによって自分の罪に気づいて悔い改めた者もいるのです(Ⅱコリント7:8以下)。パウロは、「教会は主イエスの愛の力が働く所」と本気で信じています(4)。「サタンに引き渡す」(5)とは、この主イエスの力の中にある所(教会)から、一旦、外に出すということです。なぜか？ そうしたら、イエス・キリストの救いの恵みの大きさが、今度こそ、分かる時が来るかもしれない、そうパウロは考えているのです。